

南九州城郭談話会 第57回例会
宮崎考古学会 研究会

令和8年(2026)2月15日(日)
於 池内町自治公民館(宮崎県宮崎市)



宮崎城跡について

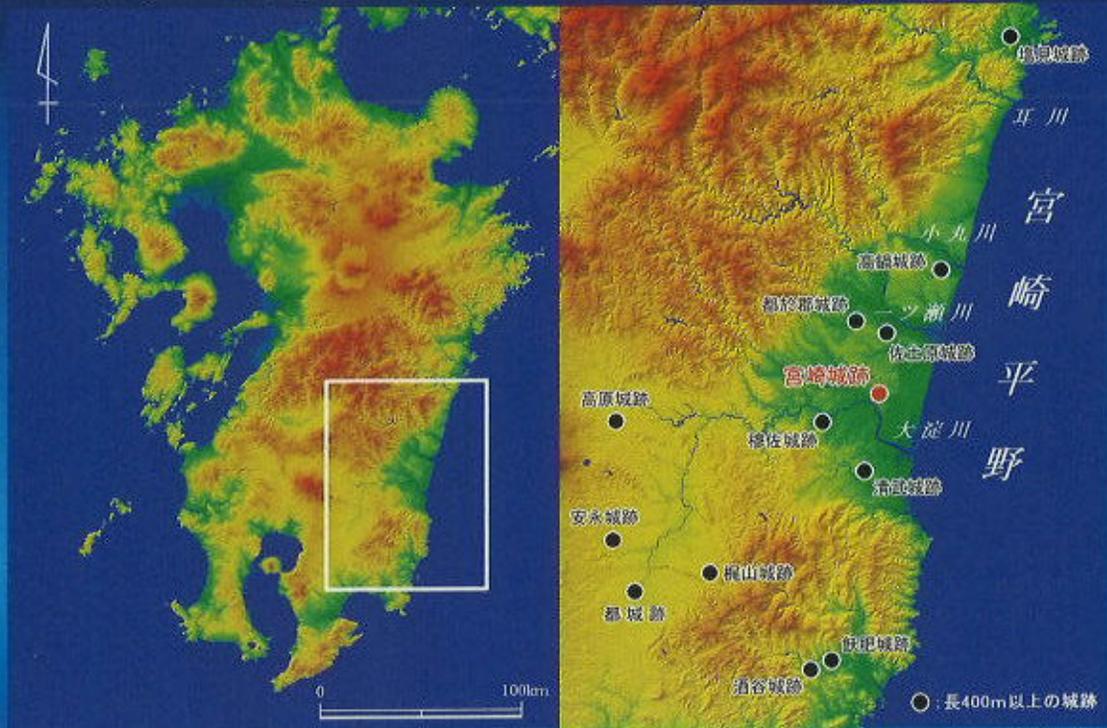
宮崎市教育委員会文化財課 竹中 克繁

宮崎城跡(宮崎県宮崎市)

- ・所在: 宮崎県宮崎市池内町・大字上北方
- ・規模: 東西730m、南北910m
※八巻孝夫氏作成縄張図(八巻2013。後述)をもとに計測。
- ※上記八巻論文で指摘された攻城側構築の可能性のある遺構をのぞくと、東西500m、南北750m。
- ・最高点標高: 92.8m(麓との比高差約70m)

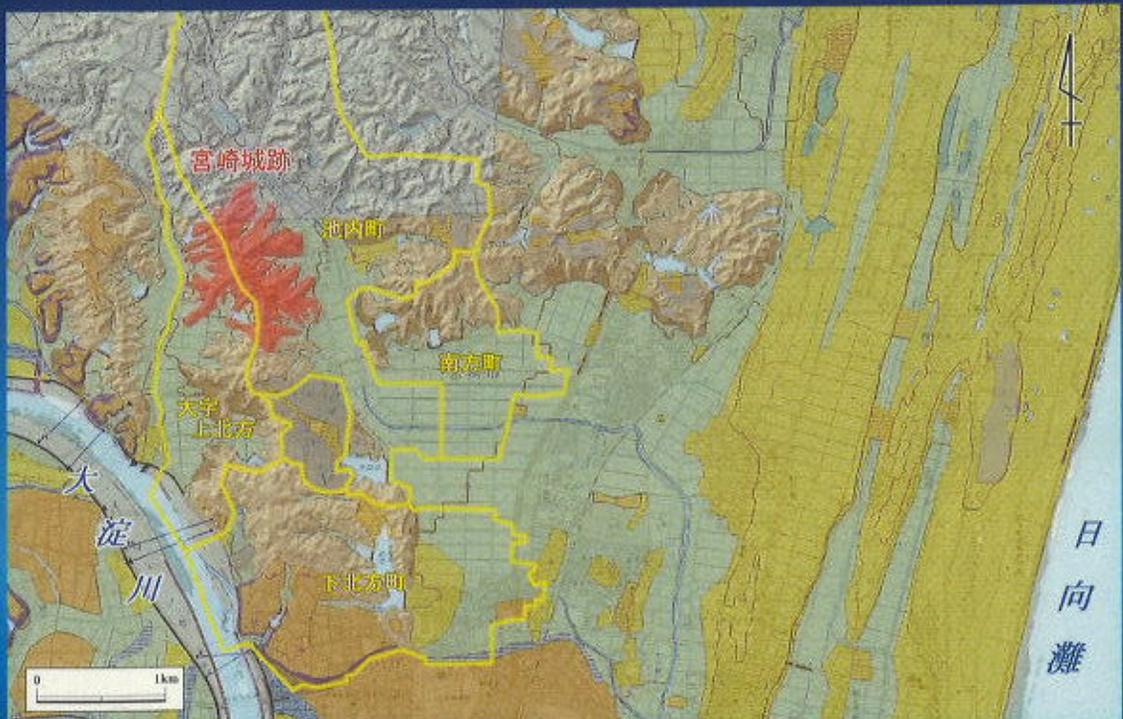


I. 位置と環境



国土地理院デジタル標高地形図「九州周辺」にキャプション・ドット等加筆

I. 位置と環境



ひなたGIS (地理院治水地形分類図・地理院DEM5・地理院淡色地図) にキャプション・字界等加筆

Ⅱ. 史料：宮崎城の初出史料

「土持宣栄軍忠状」 『旧記雜録前編』（『鹿児島県史料』1978年）等

(A) 建武3年（1336）2月7日付 嶋津庄惣政所宛（旧記前1776）

「同（建武3年正月）十四日、（肝付）兼重黨類一坪六郎入道慈圓楯籠宮崎池内城之間、一族又次郎頼綱相共馳向彼城、慈圓同甥以下生虜之、令誅畢、」

(B) 建武3年（1336）2月7日付 守護御奉行所宛（旧記前1777）

「并兼重同意圖師六郎入道慈圓、楯籠池内城之間、正月十二日、馳向彼城、捨身命盡合戦之忠、召捕其身誅伐候畢、」



大塚土持氏の拠点 蓬萊山城跡
（宮崎市大塚町）

Ⅱ. 史料：宮崎城の初出史料

「土持宣栄軍忠状」 (A) に記された戦闘の舞台

- ①「伊東弥七・弥八宿所堤」
- ②「嶋津庄穆佐院政所」→「彼城」→「穆佐城」
- ③「南加納政所」
- ④「浮田庄預所」(→「高浮田城郷」?)
- ⑤「浮田庄跡江方預所」(→「於彼政所於城郷楯籠」)
- ⑥「宮崎池内城」
- ⑦「祐廣宿所八代」
※(B)では「祐廣之城八代」
- ⑧「猪野見城」



穆佐城跡（宮崎市高岡町）

II. 史料：史料に確認される宮崎城主

南北朝	① 一坪(図師) 六郎入道慈円	南朝方の地方勢力。建武3年(1336) / 『土持宣栄軍忠状』	} 南朝方
室町	② 落合彦左衛門尉	伊東氏地頭。文安3年(1446) / 『日向記』	
戦国	③ 伊東祐吉	伊東氏9代。天文3年(1534)/ 『日向記』	} 伊東氏
	④ 伊東義祐	伊東氏10代。一時在城 / 『日向記』	
	⑤ 肥田木 勘解由左衛門尉	伊東氏地頭。伊東48城時 / 『日向記』	
	⑥ 長峰紀伊守・ 肥田木越前守	伊東氏地頭。伊東48城時 / 『日向記』	
	織豊	⑦ 日置忠充	島津豊州家朝久臣 / 『本藩人物誌』
⑧ 上井覚兼		島津氏老中 / 『上井覚兼日記』等	
織豊	⑨ 権藤種盛	延岡高橋氏の重臣 / 『日向記』等	} 延岡領

II. 史料：戦国期末の島津氏領有期

・天正6年（1578）、島津豊州家朝久領？

「(天正6年正月)廿三日、(中略)豊州江宮崎三百町可被成安堵之由被仰出、」
『日州御發足日々記』 (『旧記雜録後編』卷十一 鹿児島県 1980年)

「同(天正)六年正月二十三日日州宮崎三百町拝領イタシ家臣日置越後守忠充ヲ差遣為致警衛(中略)忠充夾野心ノ間(間?)得有之宮崎被召揚忠充罪科シレス依之朝久蒙御勘気(後略)」『本藩人物誌』 (島津豊後守朝久の項。鹿児島県立図書館 1973年)

※『本藩人物誌』では、弓の名人であった忠充の門人に伊東の旧臣がいたため、逆心を疑われたとされる。

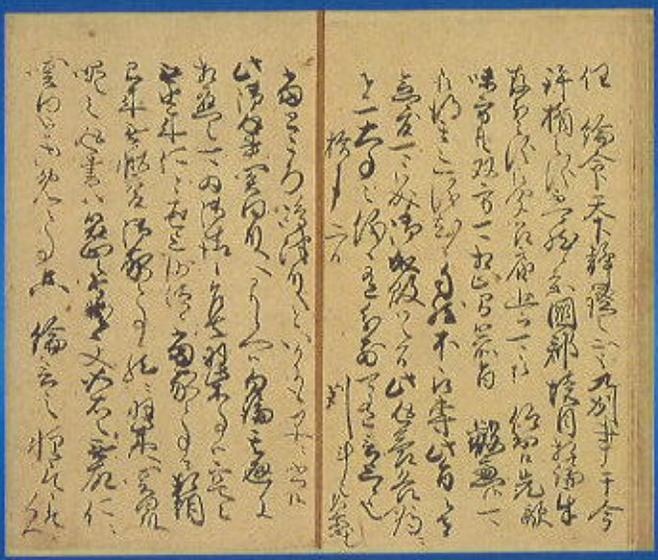


島津豊州家朝久の墓
(鹿児島県始良市総禅寺跡)

Ⅱ. 史料：戦国期末の島津氏領有期

・天正8年（1580）～同15年、上井覚兼

- 島津家の老中 **「日州兩院」**
- 宮崎平野を中心とする **「山東」** 地域に配置された諸地頭の統括
- 宮崎地頭
- 『上井覚兼日記』



『上井覚兼日記』 原本
(文化遺産オンライン)

Ⅱ. 史料：『上井覚兼日記』の宮崎城

・『上井覚兼日記』の分析による宮崎城の構造研究

若山浩章1999年「戦国末期の宮崎城下の町」『宮崎県地方史研究紀要』第25輯
 若山浩章2002年「中世城郭の普請と作事」『宮崎県地方史研究』第15号
 千田嘉博2004年「戦国期の城下町構造と基層信仰」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集
 新名一仁2017年「『上井覚兼日記』にみる南九州の城郭」『第34回全国城郭研究者セミナー』資料
 新名一仁2018年「『上井覚兼日記』にみる土木事業」『戦国大名の土木事業』戎光祥出版
 宮崎市教委編2020年『宮崎城跡』宮崎市文化財調査報告書第132集

・曲輪、登城路（登城口）の呼称

- 「内城」(天正11年6月30日ほか)
- 「和田口」(同11年6月23日ほか)、「金丸口」(同14年4月17日ほか)、
- 「柏田口」(同14年2月9日)、「目曳(之)口」(同12年7月17日ほか)、
- 「野久美之口」(同12年11月16日)、「町口」(同13年1月18日ほか)

II. 史料：『上井覚兼日記』の宮崎城

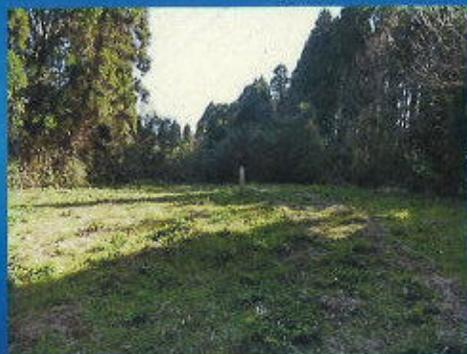
・城内の施設と維持管理

「弓場」「坪弓場」(同11年5月8日ほか)、「城戸」「垂」(同13年11月晦日ほか)、「城内之衆廿人計(=宮崎衆中の屋敷)」(同13年正月1日)「城之草払」「岸切せ候」(同13年7月18日)、「和田口直シ候」(同11年6月23日)

・城主の屋敷と付随施設

「奥座」(天正11年2月4日)
 「風呂」(同11年1月30日ほか)
 「毘沙門堂」(同11年4月19日ほか)
 「茶湯之座」(同11年4月21日ほか)
 「厩」(同12年11月17日)
 「内城庭」(同13年6月16日)
 「栈敷」(同11年8月9日)

宮崎城跡主郭現況



II. 史料：関ヶ原の戦いに関連した落城戦（織豊期）

・慶長5年（1600）10月1日、餓肥伊東氏に攻め落とされる。

- 関ヶ原の戦いに際し、当初、日向国4大名はすべて西軍方。
- 慶長5年9月15日、関ヶ原の戦い。
- 9月末日の夜、東軍方に転身した餓肥伊東氏が延岡高橋氏の支城宮崎城に攻めかかり、10月1日明け方に落城。宮崎城代権藤種盛戦死。

※大垣城（岐阜県）に籠っていた高橋元種は、9月18～23日に東軍方への寝返りに成功していた。

- 同6年8月、「上意」により伊東氏は宮崎城を高橋氏に返還。
 「去年以来ノ軍勞皆徒ニ成ケリ」
 『日向記』（宮崎県編1999年）

宮崎城代権藤種盛の墓
(宮崎市大字瓜生野直純寺)

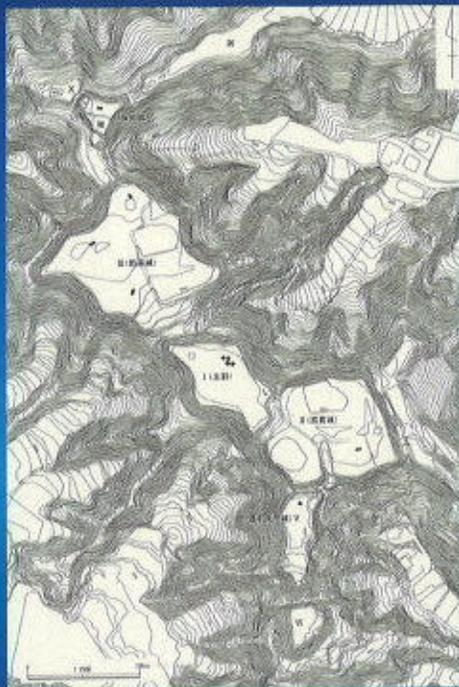
Ⅲ. 縄張

宮崎城跡の縄張研究

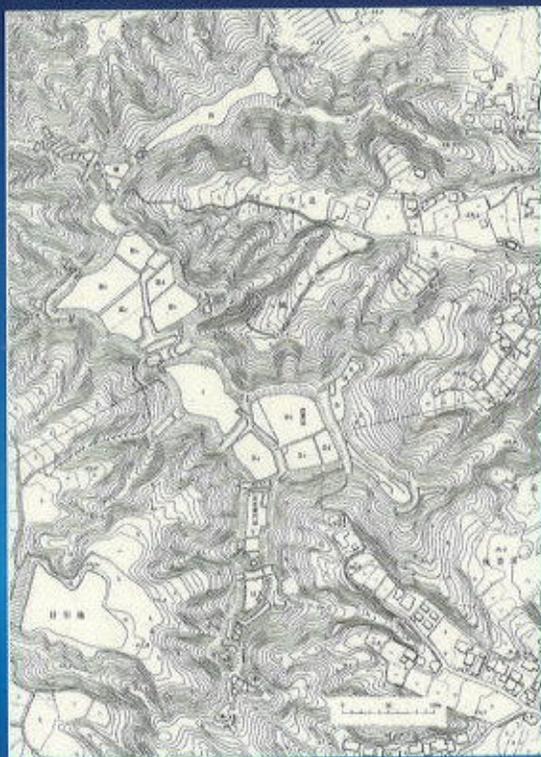
- ・ 八巻孝夫1987「宮崎城」『図説中世城郭事典』第3巻 新人物往来社
- ・ 千田嘉博2004「戦国期城下町構造と基層信仰」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集
- ・ 八巻孝夫2013「日向国・宮崎城の基礎研究」『中世城郭研究』第27号

概要

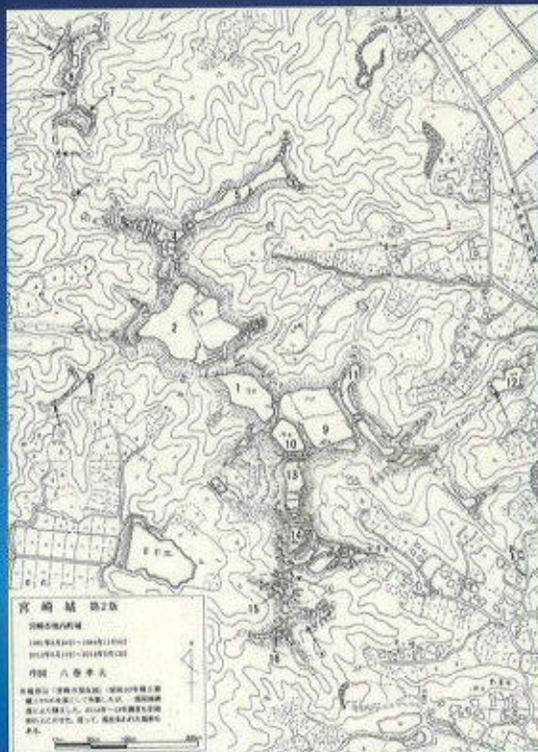
- ・ 標高90m前後の、南北に伸びる細長い丘陵に構築。
※山体の主は宮崎層群の岩盤と円礫層。
- ・ 千田氏作成縄張図（千田2004）で10、
八巻氏作成縄張図（八巻2013）で16の
曲輪。
- ・ うち主要部は5つの曲輪。



Ⅲ. 縄張



千田嘉博氏作成縄張図



八巻孝夫氏作成縄張図（第2版）

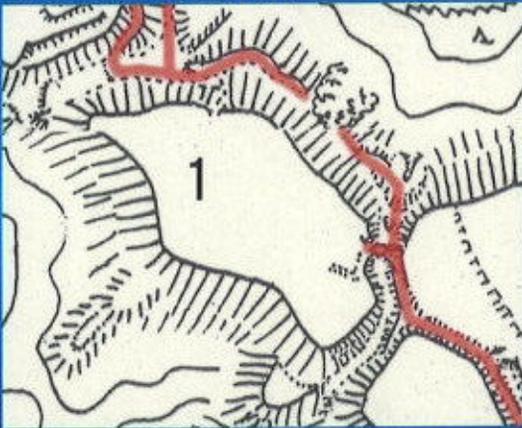
Ⅲ. 縄張

(以下、曲輪No.は千田氏作成縄張図による)

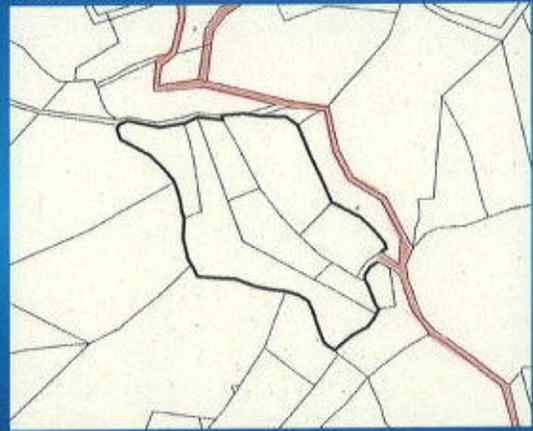
曲輪Ⅰ

- ・主郭。「椎城」の伝承名（明治期の『日向地誌』）。
- ・最高点標高91.5m、面積約3,600㎡。
- ・現況では段差等による区画のない単郭の曲輪。
- ・曲輪南東に、曲輪内から横矢を掛けるスロープ状の虎口。

曲輪Ⅰ（八巻氏縄張図部分）



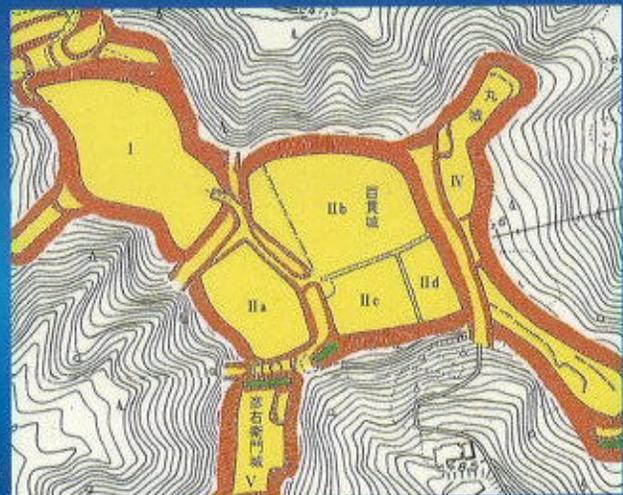
曲輪Ⅰ周辺字図



Ⅲ. 縄張

曲輪Ⅱ

- ・伝承名「百貫城」。
- ・最高点標高92.5m、面積約8,000㎡。
- ・曲輪内部は堀、溝、段差によって複数の区画に分けられる。
※千田氏縄張図では4つの区画。八巻氏縄張図では大きく2つの曲輪。
- ・曲輪南端に、外側に張り出した土塁をともなう外柵形を志向した虎口。
※『上井覚兼日記』の「和田口」に比定。大手。

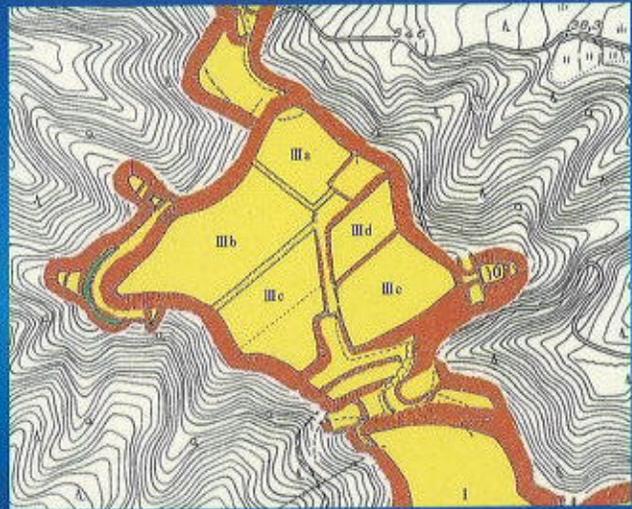


曲輪Ⅱ（千田氏縄張図部分）

Ⅲ. 縄張

曲輪Ⅲ

- ・ 伝承名「野首城」。他に「目引城・目曳城」の伝承名もあり。
※目引城・目曳城は、宮崎城跡全体の伝承名でもある。
- ・ 最高点標高92.8m、面積約9,700㎡。
- ・ 内部は段差で複数の区画に分けられる（千田氏縄張図で5つ、八巻氏縄張図で3つ）。
- ・ 曲輪Ⅰに隣接する南側は、2段の帯曲輪を経て曲輪内に進入。
- ・ 曲輪北東端現況は方形に窪む。千田・八巻両氏とも枳形と評価。

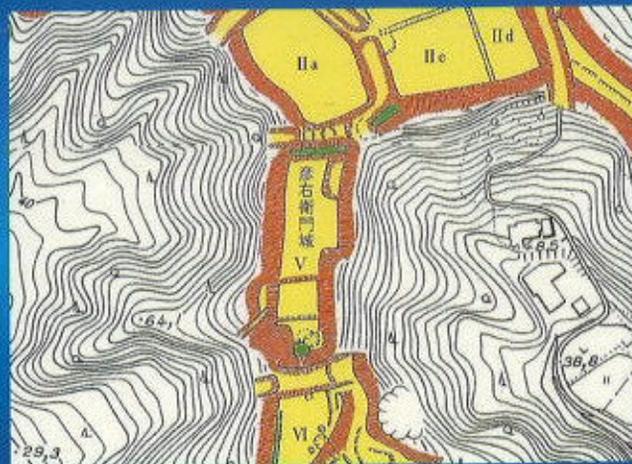


曲輪Ⅲ（千田氏縄張図部分）

Ⅲ. 縄張

曲輪Ⅴ

- ・ 伝承名「彦右衛門城」。他に「小城」の伝承名。
- ・ 最高点標高85.6m、面積約1,800㎡。南北に長い平面形。
- ・ 曲輪北側に、曲輪Ⅱとの間の堀切に面して土塁を設ける。
- ・ 曲輪南端は3段の段差をもって高くなり、城内最大の堀切に面する。
- ・ 上記の最上段について、千田・八巻両氏とも檜台と評価。

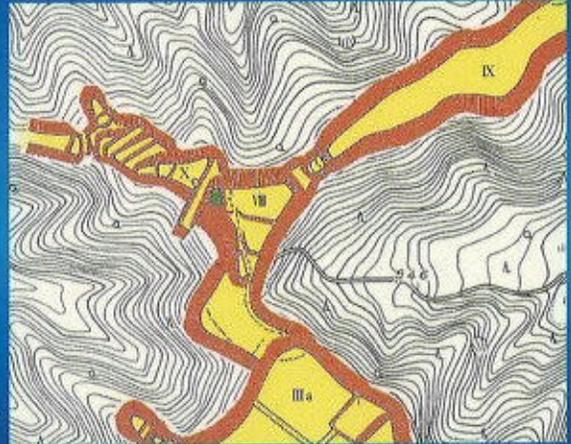


曲輪Ⅴ（千田氏縄張図部分）

Ⅲ. 縄張

曲輪Ⅶ

- ・ 伝承名「服部城」。
 - ・ 最高点標高91.7m、面積約870㎡。
 - ・ 東西それぞれに尾根が伸びる基点にあり、大きくは3段の曲輪。
 - ・ 北東側には二重の堀切。
 - ・ 曲輪北西端に櫓台。その先は大型の堀切。
- ※現況、櫓台前に3基の石碑。



曲輪Ⅶ (千田氏縄張図部分)

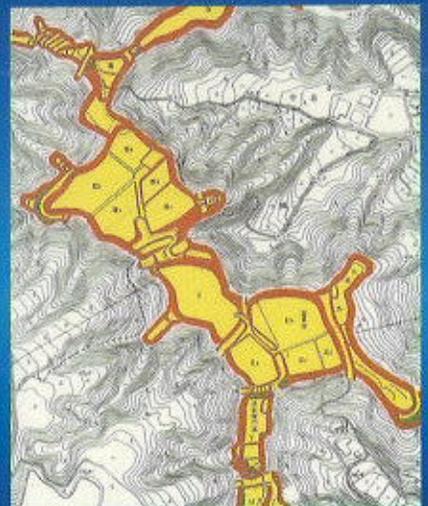
Ⅲ. 縄張

特徴

- ・ 各曲輪は大型の堀切に隔てられ、独立。
 - ・ 曲輪間に顕著な高低差のない、並列式の曲輪配置。
- ※むしろ主郭（曲輪Ⅰ）は、隣接する曲輪Ⅱ・Ⅲより1m低い。
- 南九州の群郭式城郭の範疇で捉えられる。

- ・ 細長い丘陵上に構築されているため、縦に連なる曲輪配置。

- ・ 主郭を中心に、左右対称の曲輪配置。
- 主郭（曲輪Ⅰ）の両側に、主郭より大規模で内部が複数の区画に分かれ、柵形を志向した虎口を持つ曲輪（曲輪Ⅱ・Ⅲ）、さらにその外側に、櫓台を持ち大型の堀切に面する小型の曲輪（曲輪Ⅴ・Ⅶ）。

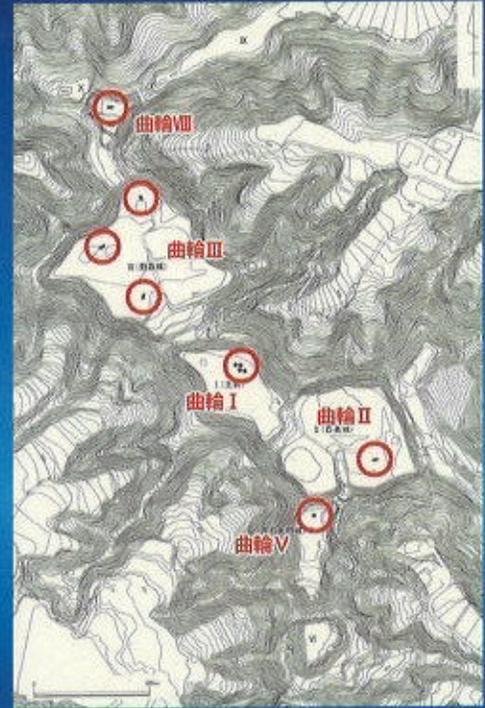


主要部 (千田氏縄張図部分)

IV. 考古学：発掘調査

調査の概要

- ・重要遺跡確認調査として平成29・30年（2017・2018）度に発掘調査実施。
- ・令和元年（2019）度に報告書刊行。
※宮崎市教委編2020『宮崎城跡』
宮崎市文化財調査報告書第132集
- ・遺構・遺物の保存状態確認を目的として、縄張図の検討から主要な曲輪と目される曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶに計10ヶ所の小規模な調査区・トレンチを設定。
- ・調査面積92.2㎡。



IV. 考古学：曲輪Ⅰ（主郭）の発掘調査



曲輪Ⅰ出土遺物

IV. 考古学：曲輪 I (主郭)の発掘調査



曲輪面造成土上の土師器坏片出土状況



IV. 考古学：曲輪 I (主郭)の発掘調査



曲輪面造成土中の瓦出土状況



IV. 考古学：曲輪 I (主郭) 周辺の表面採集資料



IV. 考古学：曲輪 I (主郭) の発掘調査

曲輪 I (主郭)

- ・ 3×3m規模の調査区4ヶ所。
- ・ 現地表よりの深0.1~0.2mでローム土の地山。
- ・ ピット、土坑、連結竪穴状遺構。
- ・ 陶磁器（天目、華南彩水滴、おろし皿等）、土師器坏、基石、平瓦。
- ・ 掘り込みによる前代の施設（深0.4m以上）を埋め立てた、曲輪面の造成と考えられる褐色土が広範囲で検出。
- ・ 上記曲輪面造成土上で土師器坏片が集中出土。坏片には煤や焦げ等の灯火具であることを示す痕跡はない。→ 城郭使用時の献杯儀礼か。
- ・ 上記曲輪面造成土中から平瓦片が出土。→ 織豊期。
- ・ 上記曲輪面造成土中には多量の焼土、炭が含まれる。→ 慶長5年の宮崎城落城戦後の片付け、改修か。
- ・ 曲輪斜面下に一定量の瓦が散布。丸瓦は凹面コビキA・B兩種、凸面縄目タタキのものもあり。飾瓦（剣片喰？唐花？）。→ 瓦葺建物の存在。

IV. 考古学：曲輪Ⅱ(百貫城)・Ⅲ(野首城)の発掘調査



曲輪Ⅱ

▼ 曲輪Ⅱ出土遺物



▲ 曲輪Ⅲ出土遺物



曲輪Ⅲ南側

IV. 考古学：曲輪Ⅱ(百貫城)・Ⅲ(野首城)の発掘調査

曲輪Ⅱ (百貫城)

- ・ 2×5m規模のトレンチ1ヶ所。
- ・ 現地表よりの深0.2~0.35mでローム土の地山。
- ・ ピット、短い溝状遺構。
- ・ 陶磁器 (天目等)、火縄銃弾丸、平瓦。

曲輪Ⅲ (野首城)

- ・ 2×5m規模のトレンチ2ヶ所、2×3.6m規模のトレンチ1ヶ所。
- ・ 現地表よりの深0.2~0.45mでローム土の地山。
- ・ ピット、溝状遺構
- ・ 陶磁器 (天目、擂鉢等)、瓦質土器、土師器坏、基石、磁器質の馬具、火縄銃弾丸、平瓦。
- ・ 曲輪南側のトレンチで、地山ブロックや焼土・炭を多量に含有する明褐色土を埋土とする平面不整形の遺構。曲輪Ⅰに面する虎口を埋め立てたものか。

IV. 考古学：曲輪V(彦右衛門城)・VIII(服部城)の発掘調査



曲輪V出土遺物

曲輪VIII



曲輪V



曲輪VIII出土遺物

IV. 考古学：曲輪V(彦右衛門城)・VIII(服部城)の発掘調査

曲輪V (彦右衛門城)

- ・ 3×3m規模の調査区1ヶ所。
- ・ 現地表よりの深0.2mでローム土の地山。ただしローム層下の円礫層と近い高さ。→掘立柱建物の構築には適さない。
- ・ 埋土中に円礫が多数入る幅1.0~1.3mの溝状遺構。ピットなし。
- ・ 遺物の出土量は極めて少ない。染付片1点、丸瓦・平瓦。
- ・ 上記溝状遺構は、土塁と並行。土塁から流れ落ちる雨水等をカットするためのものか。

曲輪VIII (服部城)

- ・ 2×5m規模のトレンチ1ヶ所。
- ・ 現地表よりの深0.03~0.1mでローム土の地山。→近年の削平か。
- ・ 遺構検出なし。
- ・ 土師器坏片1点。

まとめ

曲輪 I (主郭)

- ・日常生活が営まれていた空間。
- ・城主の居所 = 政治の場。

曲輪 II (百貫城) ・ III (野首城)

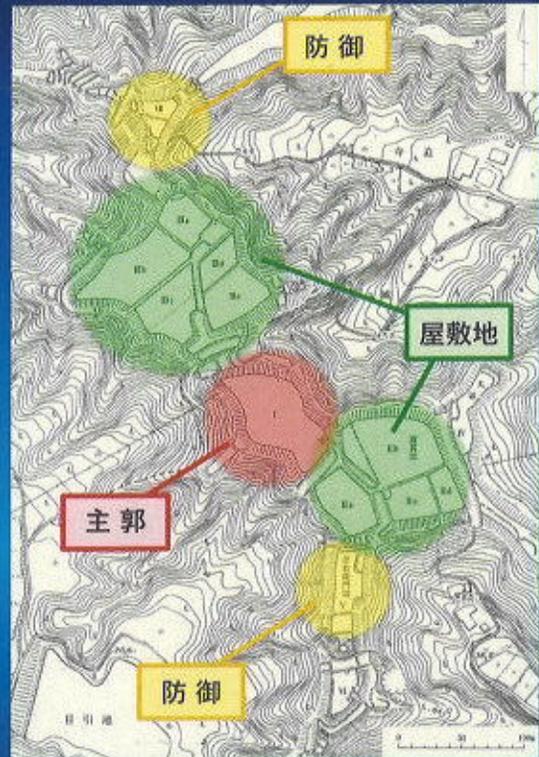
- ・日常生活が営まれていた空間。
- ・複数の区画 = 「城内の衆」の屋敷地。

曲輪 V (彦右衛門城) ・ VIII (服部城)

- ・日常生活の場ではない空間。
- ・櫓台、土塁、大型の堀切 = 防御に特化。
- ・非常時に機能を発揮する戦闘のための曲輪。

宮崎城跡の構造

- ・政治・屋敷地・防御という、機能分化が明確な各曲輪が、主郭を中心として左右対称に配置。



千田氏縄張図 (部分) に加筆